

# コロナ禍の同族経営旅館

—花巻 大沢温泉—

菅 原 智

## 1. はじめに

本章では、岩手県花巻市にある同族企業で旅館業を営む大沢温泉について、特に新型コロナウイルス（以下、COVID-19）感染パンデミックの経営に与えた影響、およびポスト COVID-19 時代に対する展望を分析した。大沢温泉は、安易にインバウンド需要狙いの旅館経営に迎合せず、自社独自の強みから価値を生み出すことを怠らない。このような観点から、本章では、コモディティ化されていない長寿同族旅館の1つの良き事例を示す。

## 2. 大沢温泉および花巻温泉郷の概要

### (1) 大沢温泉について

大沢温泉は岩手県花巻市の西部に位置する「花巻温泉郷」の中の一つの同族経営形態の老舗温泉旅館である。花巻温泉郷とは、花巻市内の53箇

所の源泉のまわりに一軒宿、湯治場、大型ホテルなど多様な宿泊施設が集合している地域の呼称である。大正時代の温泉掘削に関する法規制が始まる直前に、一攫千金を目指して大勢の山師たちが湯脈を掘ったので、このような温泉クラスターが形成された。大沢温泉は820年頃（延暦年間）に開湯されたと伝えられている。平安朝初期の武将、坂上田村麻呂が温泉を発見したとされているが実際のところは不明で、もっと以前から地元民に利用されていたのではないかという説もある。1704年（宝永元年）頃、湯地場として庶民に親しまれるようになったが、それまでは主に高貴な身分の人が愛用する場所であった。

江戸から明治の時代にかけて日本中で旅行がブームになったので、花巻温泉郷の大沢温泉も湯治場として庶民で賑わい始めたといわれている。

図表1：大沢温泉の俯瞰図



出典：大沢温泉 HP (<https://www.oosawaonsen.com>) より転載。

湯治のために長期間滞在する客も多かったため、自炊して宿賃を浮かせる人が多く、その為に宿の炊事場を開放して宿泊客が自由に使えるようにした。これが大沢温泉の今に続く「自炊部」の始まりである。現在でも、宿泊客自身に炊事場で食事を作ってもらい滞在費用のみを請求する「自炊部」プランが存在しており、料金体系は部屋代+掛け布団代+敷き布団代+枕代+浴衣代という具合に積み上げ方式を採用している。今でいうところのシェアキッチンという趣で、現在でも宿泊客同士が集まる憩いの場になっている。また炊事場には今でも10円を入れて7分使えるガスコンロが設置されている。最近では長期滞在の宿泊客は減少しているようであるが、今でも利用客はいるので湯治場・自炊部を残している。1965年頃までは、混み合う季節には宿泊客が廊下で寝泊まりすることもあったといわれている。食事時になると宿泊客が炊事場に大集合し、あちこちで酒盛りがはじまり、ふすまや障子を開放して交流を楽しんだようである。また大勢の自炊客に対応して、旅館内に酒の行商を入れていた。通常の旅館では見られない光景だが、酒屋が各部屋をまわり、かなり大きな売り上げを得ていたといわれている。

昭和の頃になると、それまでに建て増しを続け

ていたせいで、大沢温泉施設内はかなり複雑な造りになっていたという。一番古い建物は明治時代以前からあるそうだが、正確なところは不明なようである。1990年に刊行された『いわて経済夜話』によると、当時は客室棟や自炊場、風呂場などを合わせて20軒の建物があったと記されている。大沢温泉は明治初期まで志戸平温泉を所有する久保田一族のものであったが、日露戦役後の不況で久保田家が困窮し、破格の値段で別の温泉主に譲渡された。その後、第2次世界大戦下の1943年、湯治客の減少で困った温泉主が現在の所有者の高田家買い取ってもらったようである。

現在の大沢温泉は3つの主要な建物で構成されている。建物には、大型宿泊施設の本館である山水閣、前述した自炊部が残る湯治屋、そして旅籠形式の別館である菊水館となっている。山水閣は近代建築の純和風旅館であり、宴会場、会議室、カラオケBOX、お食事処、リラクゼーション施設などを有している。湯治屋の建物は200年の歴史があり、自炊ができる施設が今でも利用されており、昔から続く湯治場の風情を残す施設になっている。菊水館は茅葺き天井の施設であるが、施設前までの車両通行ができなくなったことから、旅館としては休館し、代わりにギャラリーとして

写真1：自炊部の共同炊事場と和客室



出典：大沢温泉公式 HP (<https://www.oosawaonsen.com/touji/facilities/>) から転載。

写真 2：大沢温泉の主要 3 施設



出典：大沢温泉公式 HP (<https://www.oosawaonsen.com>) から転載。

大沢温泉の過去の道具や資料などが展示されている。菊水館が開館していた当時は地元でも県北からやや高級志向の客が多かったそうだ。

大沢温泉の泉質は非常に良く、アルカリ性の単純温泉がツルツルとした感触でよく肌に馴染むといわれている。訪問時は杖をついていた客が、帰りには具合が良くなり、敷地内の温泉神社に杖を置いていった、という逸話が残されているほどである。大沢温泉内には合計 6 つの浴場がある。大きさや浴室の雰囲気異なっているので、それぞれ違った楽しみ方ができる。中でも、湯治屋敷地内にある「大沢の湯」は、現代ではほとんど見られない混浴露天風呂だ。浴槽が川床のようになっているので、湯に浸かるとまるで川べりで湯あみしているような景色が楽しめる。四季折々の雄大な景色と共に、日常では味わえない解放感を体験できる。

大沢温泉での年間の客足の推移については、1 月は新年会のために地元客が多く、逆に 8 月になると、ねぶた祭りや七夕イベントなどの観光目当てに、県外の利用客が多くなる。そして毎年 4 月は岩手ではまだ桜の季節には早いと、地元客もゴールデン・ウィークをひかえているため客足が遠のくという。

## (2) 花巻温泉郷の概要

花巻のように、温泉群がある都市は全国でも珍しいようである。もともと、現在の花巻温泉郷の周辺にいくつかの温泉があり、ほぼ同時代に発見、利用されるようになったといわれている。さらに

大正 8～9 年頃、温泉法可決前に温泉を掘って一攫千金を狙う山師たちが湯脈を開発した結果、現在では花巻市内では温泉が全部で 53 箇所もあり、東北でも稀な温泉都市となっている。

このうち湯本の台温泉、西口温泉の志戸平そして大沢温泉には、平安朝初期の武将である坂上田村麻呂に関する伝説が残されている。その伝説では死闘を制して花巻に到着後、観音様のお告げで温泉を発見し、部下将兵の傷を治したとされ、そのお告げの地に設置した観音像が、現在の太田の清水観音であるといわれている（熊谷 1968 年）。また、花巻市にあるホテル花巻の敷地内に、台温泉を利用する客のために建てたとみられる石碑が 1697 年（元禄 10 年）4 月に建立されており、今から 300 年ほど前にはすでに温泉の存在が広く知られ、この地域には温泉客が溢れていたようである。

1915 年（大正 4 年）7 月には温泉場と花巻駅を結ぶ電車が開通し、西公園から松原（大沢温泉から 4 キロほど手前まで）を走っていた。また松原から台温泉方面へは馬車や人力車が出ていたが、大沢温泉などの西口方面へは交通が限られており、徒歩で向かう湯治客も多かったようである。しかしながら、当時はまだ株式会社花巻温泉（以下「花巻温泉」と呼ぶ）ができていなかったため、大沢温泉を含む西口温泉郷は全盛時代を迎えていた。

## (3) 株式会社「花巻温泉」の開業

大正初期における交通の発達とともに、地元の

図表 2：花巻温泉郷の地図



出典：一般社団法人花巻観光協会 HP「花巻の旅」(<https://www.kanko-hanamaki.ne.jp/hanamaki12to/>) から転載。

有力者と企業、行政の間で“台遊園地新温泉”という一大構想が立ち上がってきた。「余った湯を利用して遊園地を作り、より温泉地を発展させたい」という地元の有力者らと、鉄道会社の「電車の軌道を伸ばして収益を上げるためには、収入源になる遊園地が必要」という点で、双方の目標が一致したのである。1921年（大正10年）頃に用地買収などに動いていた伊藤篤次郎が急死し、盛岡の大財閥を仕切る金田一国土が後の事業を引き継いだ。金田一は非常に辣腕で、自身の傘下にある盛岡電気工業と花巻電気を合併させることを条件に、遊園地建設を引き受け、電車の開通を実現させた。

1923年（大正12年）金田一が計画をブラッシュアップするなかで、温泉旅館「花盛館」が開業した。盛岡電灯会社の温泉事業として始まり、その後、新たに旅館を5つ、別荘13棟、遊技場の他に、動物園や植物園、テニスコートにプール、商店街など数多くの施設を新設し、全国的にその名が有

名になった。花巻出身で有名な宮沢賢治も計画に参加し、庭木や並木の指導、南斜花壇を設計したようである。1927年（昭和2年）、名称を「台遊園地新温泉」から「花巻温泉」に変更し、全国的にアピールして成功を納めた。当時、独自に温泉の広告映画を制作したり、飛行機でピラを撒いたりなどして精力的にPRし、大阪毎日新聞社と東京日日新聞社が全国公募した「日本八景」で、箱根温泉に次いで第2位の得票数を獲得した。同年に株式会社として電灯会社から独立した。

しかし、第2次世界大戦中は、経営は全般的に苦しく、海軍病院に利用された旅館もあった。終戦後も米軍の駐屯地になり、建物の損壊はかなり激しかったようである。1947年3月に米軍から返還され、1年がかりで立て直し、再スタートさせた。その後は、復興に苦しんだといわれるが、転機を迎えたのは1964年に京風数奇屋造りの佳松園を落成させた時であり、桃山様式を取り入れた建築美が業界や宿泊客から大いに注目された。

図表 3：花巻温泉施設内マップ



出典：花巻温泉 HP (<https://www.hanamakionsen.co.jp/facilities/images/park/park.pdf>)より転載。

なお、「花巻温泉」と花巻温泉郷は名前が似ているため混同されることもあるが、前者は単体の温泉宿経営組織であり、後者は花巻市内の多様な温泉宿が集合している地域の呼称である。

### 3. 大沢温泉の経営課題

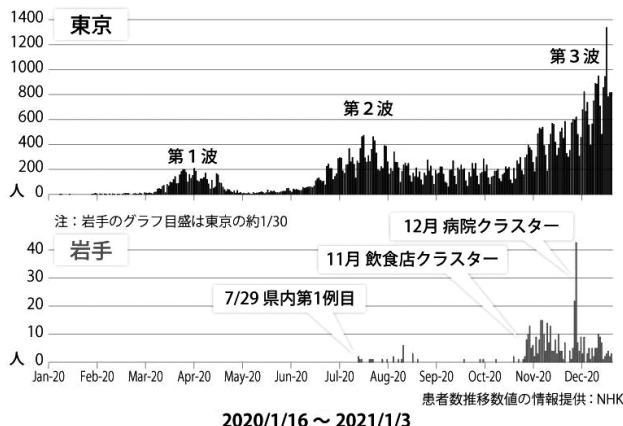
#### (1) 新型コロナウイルス感染パンデミック禍における経営

大沢温泉も COVID-19 感染拡大の影響を大きく受けた。大沢温泉の代表取締役社長である高田貞一氏の話によると、COVID-19 が感染拡大していた 2020 年 5 月は、市役所の要請でほぼ全面休業を余儀なくされたという。したがって、この年には本来客で賑わうゴールデン・ウィークに営業ができなかったため、売上は大きく減少した。また 2021 年も、休業こそ無かったものの、売上は本格的には回復しなかった。その理由としては、岩手県独自の COVID-19 対策の影響があったと高田氏はみている。岩手県では独自の緊急事態宣言を頻繁に発令し、自粛を呼びかけていたので、感染者数は全国的にも低い値を保ってきたが、経済への影響は甚大なものとなった。その影響を緩和するために、政府による Go To Travel 政策以外にも、岩手県は独自の助成制度を設け、業界を支援しようとしたが、助成の枠が不十分なために、経営成績への悪影響を和らげるには至らなかった。

また、旅館を経営する側としては、COVID-19 が世の中に蔓延する中でも、安心して旅行客に来てもらうためには、新たな設備投資をせざるを得なかった。COVID-19 対策については、市から設備費の 7 割を補助してもらえたが、抗ウイルス機能付きの空気清浄機や畳の張り替えなどに、これまで合計 500 ～ 600 万円ほどの追加出費が必要となった。またこの時期には、旅館を休業せざるを得ない場合でも固定費の負担は必要であったので、自治体の助成金や銀行からの緊急融資があっても経営は厳しいものであった。

コロナ禍の収束後の展望についても、高田氏は危機感をもっていた。その大きな理由は、コロナ禍に従業員の離職が多数あり、現状としては客足が回復したとしても即座に受け入れる体制が整わないためである。離職の原因については感染拡大の影響で仕事が減ったということももちろんあるが、そもそも業界内での若手の離職率が高いということが最も大きな原因であると指摘されていた。また、女性だと結婚や出産など、ライフ・ステージの変化が影響するケースが多いという。高田氏は、こうした働き手側の要望に大沢旅館の経営者側がきめ細かく応えるのはハードルが高いと感じているようだ。何か対策をするべきだと考えてはいるが、現時点では感染拡大による影響から経営を現状維持する努力で精一杯という苦しい状況に

図表4：岩手県の日別 COVID-19 新規感染者数の推移表



2020/1/16～2021/1/3

出典：日医 Online の HP (<https://www.med.or.jp/nichiionline/article/009864.html>) より転載。

立たされている。

## (2) ポスト・コロナ戦略

花巻温泉郷の他の温泉旅館と比較すると、もともとインバウンドの客が少なかったというのが大沢温泉独特の大きな特徴である。コロナ禍以前の2019年には花巻市には外国人観光客は212万人も訪れていたようであるが、COVID-19の感染拡大の影響を受けた2020年には9,100人まで減少したといわれている。今回のような世界規模のパンデミックにより国を跨いだ移動が制限される状況下では、インバウンドの宿泊客に依存していなかった大沢温泉にとっては、国内旅行客の集客に的を絞って経営展開できるというメリットがあった。

前述した大沢温泉の湯治場としての歴史的特徴からも、これまでも近隣の東北地方からの旅行客が主であり、特に岩手県内からの個人の宿泊客が多いという特色がある。コロナ禍においても、国内の緊急事態宣言が解除されると大沢温泉ではすぐに客足が回復していたようであった。これに対して海外旅行客が多く利用する「花巻温泉」とは異なり、インバウンド旅行客数の回復を待たずとも経営の回復を達成できると考えることができる。

日本経済新聞（2022年12月22日付）において、大沢温泉を含む花巻温泉郷の9事業者が合計19億円を投じて施設改修を年度内に行うことが報

道された。2023年には他の事業者もこの一斉改修に加わり、温泉郷としての魅力を共に高めることを目的としている。この一斉改修プロジェクトはコロナ禍で疲弊する観光地の再生を後押しする観光庁の助成事業を活用したもので、各宿泊施設が実施する大規模改修に1施設あたり最大1億円を国が事業者に補助するというものである。花巻市

図表5：一斉改修の具体的内容

花巻温泉郷などで改修を進める宿泊施設	
事業者名	主な事業内容
花巻温泉	貸し切り風呂の新設。大浴場の改修。佳松園の客室を温泉露天風呂付きに改装。和室の洋室化
廣美亭	客室の改修
ガーデンリゾート悠の湯風の季	客室を中長期滞在ワーケーション対応へ改装。ラウンジカフェをオープンテラスカフェに改修
志戸平温泉	和室を和洋室に改装。入り口フェンスや外壁を改修。一部の客室をスイートタイプに改修
大沢温泉	菊水館や湯治屋の改修。山水閣の客室改修や大広間のパーティションのデザイン化
愛隣館	外壁改修。広間のレストラン化
ホテル三右工門	パブリックトイレと看板の改修
松田屋旅館	一部の客室を貴賓室に改装
ホテルグランシエール花巻	コンセプトルームや大浴場を新設。客室の増設や外壁の改修

出典：日本経済新聞 2022年12月22日付・地方経済面東北 p.2 より転載。

が観光庁に申請したこの地域計画が岩手県で唯一採択された。大沢温泉では、この助成を活用して、昔ギャラリーとして利用していた館内を改修し、部屋の壁を取り払ってフローリングのホールを作ることを決めている。茅葺の天井裏も室内から見上げられるように改修し、多目的に利用できるようにするという計画である。海外からの個人の宿泊客にターゲットを絞るよりも、国内のコロナ感染状況の様子をみながら、地元客が宴会やイベントなどを企画したり団体で宿泊しやすい施設を充実させたりすることは、地元客密着型の大沢温泉としては理にかなったポスト・コロナ戦略であると考えられる。

### (3) 地域振興

旅館が発展していくためには地元の盛り上がりが必要不可欠だが、その点に関しても高田氏は課題を感じている。花巻温泉郷は全国でも類を見ないほど、個性豊かでバリエーションに富んだ温泉と旅館の数々が楽しめる土地ではあるが、温泉同士が離れているため、道後や有馬のような「湯めぐり」という客の動線作りが困難である。「花巻温泉」などは、自社の経営する3施設間で湯めぐりのサービスを独自に運営しているが、他の旅館との協働はみられない。

過去に行った大沢温泉内でのアンケートによると、温泉以外にも観光の予定がある宿泊客は、全体の4割程度しかいなかったようである。したがって温泉郷の中で人の移動が少ないために、周辺の観光スポットや商業施設などが発展しづらいと考えられる。ゆえに、地元民からすると、温泉郷を盛り上げるのは自分たちの役目ではないと思っているふしがあるようだ。旅館同士の連携もそこまで固いというわけではない。高田氏も地域振興に取り組んではいるが、個々の取り組みになってしまうので、大きな成果は難しいと感じている。やはりその理由は、それぞれの温泉地が2-3キロずつ離れた距離にあることではないかと高田氏は述べていた。花巻温泉郷として、圏内に多くの温泉が集まっているのは確かであるが、有馬温泉や城崎温泉、草津温泉など他の有名な温泉地と比べると、それぞれが少し距離のある異なるクラス

ター形態を形成しているため、また異なる地域振興戦略が求められるのかもしれない。また、花巻温泉郷という名前は、県外の人からすると一事業者の「花巻温泉」と誤って解釈されがちであり、名称として花巻・大沢温泉など、新たな呼称を考案するのも一案ではないかという意見もこれまであった（日本経済新聞 2022年12月22日付・地方経済面東北）。

しかしながら、地域で協働していることが全く無いわけではない。前述した、2022年12月の花巻温泉郷に属する事業者が施設の斉改修を産官一体で進め、地域としてブランド力を高めていくことは1つの重要な取り組みであるといえる。また近年では、周辺住民やスキー場のスタッフと協力して「スカイ・ランタン・イベント『はなまき星めぐりの夜』」を開催してきた。これは、鉛温泉スキー場活性化協議会が主催するイベントであり、毎年1月から3月までの週末に何度か開催され、個人では参加できないが協議会に属する温泉宿（大沢温泉も参加）の宿泊客であれば、温泉宿から鉛温泉スキー場の会場までの往復シャトルバスが提供され、冬の夜空にランタンを飛ばすことができるというイベントである。夜空にランタンの光が優しく浮かび、幻想的で心が温まる風景をつくりだしている。岩手の冬の寒さは厳しく、客足が減ってしまうために始めたイベントで、徐々に認知され集客が高まってきていた。残念なが

写真3：スカイ・ランタン・イベント「はなまき星めぐりの夜」



出典：花巻の旅 HP ([https://www.kanko-hanamaki.ne.jp/special/sky\\_lantern/index.html](https://www.kanko-hanamaki.ne.jp/special/sky_lantern/index.html)) より転載。

らコロナ禍で2年連続休止となってしまったが、2023年には再開された。

地域振興や観光施策については、2022年に3選を果たした上田東一花巻市長は、「ワイナリー巡りなどの体験型の観光や新たな観光ルートの開拓をし、魅力を高めていく」と強調している。その取り組みの中で、東北有数の温泉群である花巻温泉郷を有機的に結びつける地域振興策があれば、この地域は多くの可能性を有していると考えられる。

#### (4) 事業承継

事業承継については、特に今の段階で具体的なことは何も決まっていないと高田氏は語る。大沢温泉は戦時中に高田氏の祖父が買い取ったもので、祖父は温泉業の傍ら、他の事業もやっていたようだ。高田氏の父が後任に就くが、49歳の若さで亡くなってしまふ。その後、会長には母が就任したが、山水閣を建てた時に、とても自分ではこんな大きな旅館は手に負えないということで、長男である高田氏に経営権を託した。当時、高田氏は土木関係の仕事に就いていたが、母親の要請で家業に入った。会社を経営するようになってから15～16年ほど経つが、特に大変だったことは震災とコロナだと答えた。リーマンショックも経験しており、どれだけ事業を頑張っても報われないという感覚がある。震災の時も大変だったが、日本全体が被災地を応援しようという気持ちが強く、苦しい期間は2年間で終わったことが救いだっ

た。しかし、コロナ禍が明けた今も苦しい状況が続いている。最近（インタビュー時：2022年1月）では半年に1度程度ほど、コンサルティング会社から連絡が入り、事業譲渡やM&Aなどの商談を受けるようになったようである。高田氏は、最近も東北の有名で高評価な料亭宿が、経営者の高齢化のため、あっさりと事業譲渡してしまった例を挙げていた。多くの老舗旅館が経営譲渡されるような時代においても、代表取締役社長の高田氏の母は会長、実弟も専務であるということで、大沢温泉を同族経営で堅持している状況が窺える。

#### 4. 長寿同族経営の秘訣

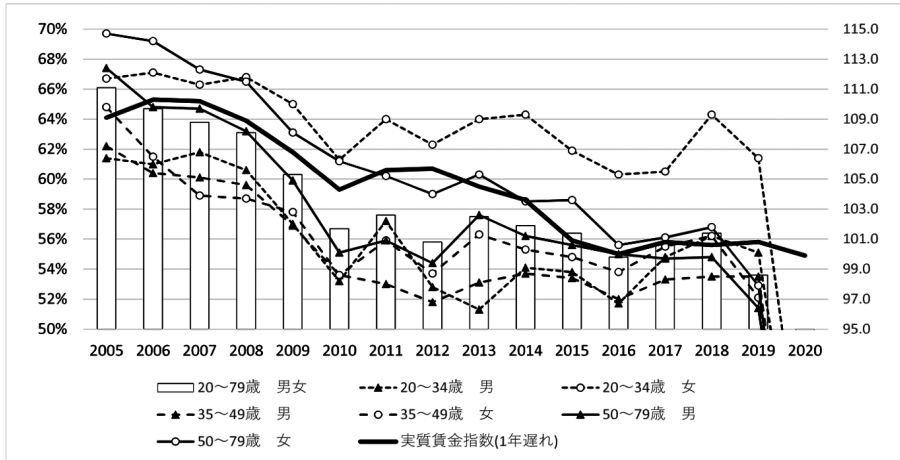
大沢温泉が長寿企業である秘訣としてまず指摘できるのは、「自炊部」という食事提供サービス業務が必要ない部門を有していることであると考えられる。例えば、ある研究では、近年の家族経営形態の小規模旅館が経営譲渡を行った結果、成功する要因として、譲渡後にこれまでのサービスを刷新し、食事を提供する一般的な旅館業態から素泊まり型に変更したことで、旅館の主要なコストである売上原価（食材原価）とサービス要員を削減することができ、営業利益率と労働生産性が向上するといわれている（井門 2022）。自炊部の利用は以前と比べかなり少なくなってきているといわれているが、大沢温泉がある一定比率の宿泊売上をこの事業部門から得られていることは、前述の理由から経営を支える要因になっているといえる。高田氏も、この自炊部については、「古さを逆に強みにするように工夫し、昔からの温泉風情をお客様に楽しみ続けて頂きたい」と述べている。この戦略は財務の視点からも、理にかなった方法である。

また大沢温泉は、混浴を認める露天風呂として、他の温泉旅館とは異なる価値を有していると考えられる。その意味ではコモディティ化されていない温泉旅館である。近年、女性が入浴するのを待ち構える男性達が混浴風呂に出現し、「ワニ族」と呼ばれて問題視されている。しかし高田氏は、大沢温泉の混浴露天風呂は川にせり出し対岸から見えるほど開放的なため、「マナー違反が起きたことはほとんどない」という。そして、女性に配慮した女性専用の時間帯を設けるなど、工夫も怠らず、この価値の確保には努力を惜しまない。実際、2005年あたりには高い宿泊観光実施率を誇っていたシニア世代（50～79歳）の減少は甚だしく、最近では平日需要が減少し、女性需要をはじめとする現役世代の週末需要へとシフトしている状況が見られるといわれている（井門 2022）。女性のニーズに柔軟に応える経営努力は、温泉旅館の魅力を決やさないための重要な方策であると考えられる。

最後に、大沢温泉はこれまで東北地方、特に地元の岩手県からの客が主要な宿泊客であり、彼ら



図表 6：宿泊観光旅行実施率推移



「じゃらん宿泊旅行調査2021」及び厚生労働省「毎月勤労統計調査」をもとに作成。

注：2020年の20～79歳男女の値は31%。同年の最高値は20～34歳女性の39%、最低値は35～49歳女性の27%

出典：井門 2022、p.66「図2 宿泊観光旅行実施率推移」から転載。

がリピーターとして大沢温泉に通い続けてきたことが長寿経営に大きく貢献してきたと考えられる。この点は、コロナ禍においても、緊急事態宣言が解除される度に、客足が回復していたという事実からも、今日でもこの傾向の存在は裏付けられていた。そして、この地元志向の特徴が、今後の経営においても大きな強みになると考えることができるのである。近年は、観光業といえばインバウンド客を如何に獲得するかが叫ばれているが、ある研究では、新しい需要をインバウンドに依存するだけでは危険であると危惧する見解も存在する (Bricker 2019; 井門 2022)。これは日本でも起こったように、国がある程度経済発展すると人口が減少に転じるからであると説明されている。国際化が今のように進行すると、インバウンド客を全く受け入れないという選択はあり得ないが、外国人客がたくさん押し寄せるようになると、これまで守り続けてきた混浴などにも影響があるかもしれない。

## 5. 参考文献・ウェブサイト

- 安藤昭 (2020) 「変わらぬ人気を誇る一大温泉リゾートー 岩手老舗物語」 ([https://noren100.site/images/pdf/spr\\_05.pdf](https://noren100.site/images/pdf/spr_05.pdf)).
- 井門隆夫 (2022) 「小規模旅館業の労働生産性と今後の展

- 望」『地域政策研究』24 巻 3 号、61-70 頁。
- 川村等 (1990) 「いわて経済夜話」4 月号、岩手日報社。
- 熊谷章一 (1968) 「花巻市史」花巻市教育委員会。
- 高田貞一 (2013) 「当節・湯治場の様相」『温泉 (一般社団法人 日本温泉協会)』81 巻 857 号、10-11 頁。
- 宮田剛 (2021) 「新型コロナウイルス感染症に関する岩手県からの報告」『日医 online』 (<https://www.med.or.jp/nichiionline/article/009864.html>).
- 匿名 (2022) 「花巻温泉郷が一斉改修 第 1 弾、9 社で計 19 億円投資 コロナ下、集客増めず」日本経済新聞 12/22 版・地方経済面東北。
- Bricker, D. and Ibbitson J. (2019) Empty Planet: The Shock of Global Population Decline, Robinson.
- 大沢温泉 HP (<https://www.oosawaonsen.com>).
- 花巻の旅 HP ([https://www.kanko-hanamaki.ne.jp/special/sky\\_lantern/index.html](https://www.kanko-hanamaki.ne.jp/special/sky_lantern/index.html)).
- 花巻温泉 HP (<https://www.hanamakionsen.co.jp/facilities/images/park/park.pdf>).

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP21H00754 の助成を受けて実施した。